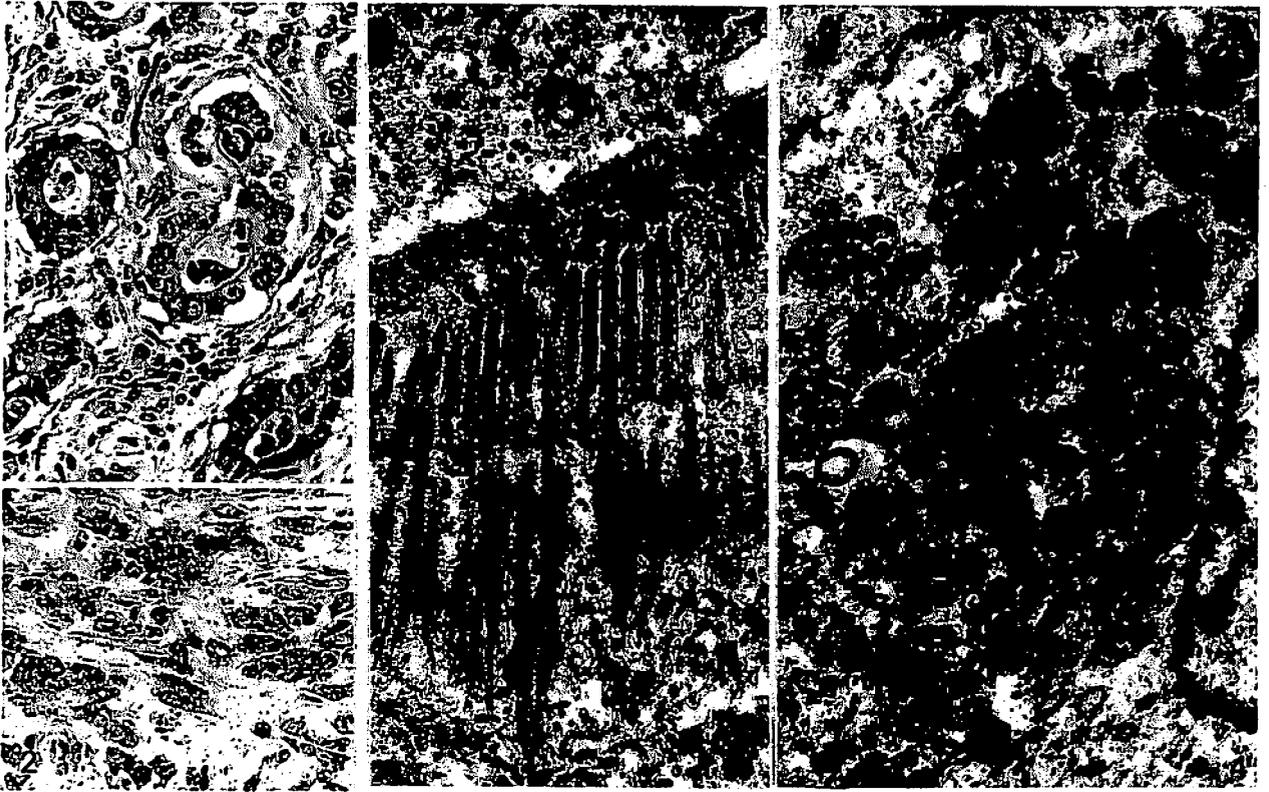


牛の子宮と肺

家衛試病理第三研究室・栃木県食肉衛検那須支所出題 第26回獣医病理学研修会標本No.464



動物：ホルスタイン種，雌。

臨床：乳廃用牛として屠殺されたが，生体検査では著変は認められなかった。

剖検所見：子宮頸から体にかけて手拳大の腫瘤があり，刀による切断に対し抵抗感があり，剖面は結合組織に富んでいた。骨盤腔内のリンパ節はほとんどすべて腫大，硬化し，切断時に刀に粘液様物が附着し，剖面では一部に乾酪化および石灰化が見られた。肺では硬い米粒大ないしクルミ大の結節が多発し，剖面にはわずかな粘液様物，出血，壊死が認められた。

組織学的所見：腫瘍組織は子宮の筋層に認められ，管状構造をとる腫瘍細胞と豊富な結合組織性間質より成っていた。腫瘍細胞は大型で立方形，核も大きく卵円形，クロマチン網は繊細で明るく見えた。核小体は目立たず，時々核分裂像が認められた(写真1)。管腔側には微絨毛があり，腔内にはしばしばPAS陽性の物質が存在していた。肺およびリンパ節にも同様の腫瘍組織があり，豊富な間質の一部にリポフスチンを持った紡錘形細胞の浸潤

が認められ(写真2，PAS染色)，同じ細胞は子宮にも少数ではあるが確認された。

腫瘍細胞の電顕的特徴はcore filamentを持った多数の微絨毛で，そのfilamentは細胞質内に伸展してrootletとなっていた。管腔内には無数のglycocalyceal bodyがあり(写真3)，分泌顆粒や粘液は認められなかった。間質の紡錘形細胞の細胞質内は多くの膜様構造で充満していた(写真4)。

肉眼的，光顕的所見は今までの牛子宮腺癌の報告と一致していた。電顕的にはglycocalyceal bodyおよびcore filamentを持った微絨毛がこの腫瘍の特徴であったが，子宮内膜の構成細胞から考えて，線毛や粘液が出現する可能性や性周期による形態学的変化の可能性もある。間質の膜様構造は滑面小胞体に由来すると思われ，リポフスチンを持ったこのような間葉系細胞は，ステロイドホルモン産生細胞の終末像とみなされた。

組織学的診断：肺への転移を伴った牛の子宮腺癌。